

近代以前に形成された茶産地の景観構造

荒井 歩*・植田 寛**

(平成 21 年 8 月 6 日受付/平成 21 年 12 月 4 日受理)

要約：茶は時代により異なる社会需要に応じて、産地を変化させ、茶の栽培・製茶技術をつくりだしてきた。また、茶の生産に適した自然環境が、茶産地の形成に深く関わっている。そこで本研究では、日本における茶産地の発祥状況や形成過程を整理すると共に、地形・水系を把握した上で、茶産地における景観構造を明らかにすることを目的とした。

研究対象地として、茶の生産に適した自然環境状態により栽培地が選定されていた近代以前からの産地 25 地区を選定した。調査分析の結果、茶産地の発祥要因は、発祥の祖の相違により 4 タイプに分類された。また、茶産地の形成過程は、主導者や生産・流通体制などの茶産業のあり方の相違により 5 タイプに分類された。茶産地の地形構造は、茶産地と河川の立地関係により 4 タイプに、茶産地と傾斜分布関係から 3 タイプに整理された。最後に景観構造のタイプ分類を行い、茶産地の景観構造は発祥時期や発祥要因によって特徴づけられると共に、これらの要因が茶産地としての選定にも影響を及ぼしていることが明らかとなった。

キーワード：日本茶産地、茶園景観、地形、景観構造、文化的景観

1. 研究の背景と目的

茶業界における産地呼称基準の設定 (2004) や、栽培から製茶までをひとつの農園が行う単一農園茶、有機栽培を行う茶園などに対する評価が高まりつつある¹⁾。ワインの品質保証に、栽培地における気候、土壌、地勢などの自然条件などを総合的に評価するテロワール概念があるが、この概念は日本茶にも適合するという海外からの指摘²⁾もあり、近年は茶業における伝統的手法に注目が集まっている。

一方、「農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究 (報告)」(2005) において、静岡県「牧ノ原大茶園静岡県牧ノ原地」や埼玉県「人間の茶畑」が重要地域として選出された³⁾。平成 21 (2009) 年には、茶園によって構成される茶業の独特な景観を含む「宇治の文化的景観」が「重要文化的景観」として選定された。日本固有の自然と文化を継承する観点から茶業の景観が注目される潮流にある。

平成 16 (2003) 年の文化財保護法一部改正に伴い設けられた「文化的景観」とは、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地」の保全を目的とする。前述した「農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査」(2003) を始めとし、近年農山村における産業に関連した景観研究が行われている³⁾。

マテオら (2005) や宮脇ら (2008) は、農山村の文化的景観における景観構成要素に着目し、変遷等について整理を行った^{4,5)}。また水野ら (1999) は、農村における場の景観に着目し、その変遷について調査を行った⁶⁾。佐藤ら (1997) は、琵琶湖湖岸全域の土地利用変遷を整理し、景観

変化の要因について分析を行っている⁷⁾。

しかし、農山村の景観とは農業形態や空間整備により常に変化し続けてきた景観である。横張ら (2009) が指摘するように、「農村景観の保全は、姿カタチや機能の背景にある、環境と人との生きた関係性の保全にまで立ち戻って考えるとき、はじめて展望され」、「創造的な行為としての認識が必要」である⁸⁾。そこで産業が営まれる環境と人との関係性を明らかにした上で、その眺めとして表れる景観の特徴を構造的に整理することが重要と考えた。

深町 (2000) は、農山村の景観を地形と土地利用との関係から構造的に捉え、三好ら (2007) との研究において地形要因と水利用形態との関係によって構築された地区景観について分析を行っている^{9,10)}。

本研究は、「生きている景観」¹¹⁾ として注目されつつある茶園を研究対象とし、茶業を生活基盤とした農山村において、現在の茶業景観の基盤となる景観形成過程を、地形的要因と人為的要因から整理し、景観構造の明確化を目的とした。

2. 研究の方法

(1) 茶生産および茶文化の概要把握

文献調査から日本茶生産の概要について把握した¹²⁻¹⁴⁾。また、茶文化と社会背景の関連性を整理し、日本茶 (以下、茶と記す) に関する時代区分を行った。

(2) 対象茶産地の選出

文献調査から日本国内における茶産地とその所在地、特徴を把握した¹⁵⁻¹⁷⁾。次に茶生産の特徴を鑑み、本研究の対

* 東京農業大学地域環境科学部造園科学科

** 浜松市役所

象茶産地の選出基準を検討し、対象茶産地を選定した。

(3) 茶産地の発祥要因の把握

文献調査から茶産地の発祥要因について整理を行い、栽培の祖にみられる特徴毎に類型化を行った。

(4) 茶産地の形成過程の把握

文献調査から茶産地の形成過程を整理した。少量の茶栽培と限定的な茶利用だけでなく、茶産業として需要と供給の関係が成立した時期に着目し、茶産業形成の主導者および茶産業の内容毎に類型化を行った。

(5) 茶産地の地形構造の把握

国土地理院発行の1/25,000の地図を用いて、茶産地の平面模式図と断面図を作成し、地形および水系の状態を把握した。次に、把握した茶産地の地形構造の類型化を行った。

(6) 茶産地の景観構造の把握

類型化した茶産地の発祥および形成過程と地形構造との関係を分析し、茶産地の景観構造の特徴について考察を行った。

3. 茶生産の概要把握

茶生産の概要を把握するため、茶栽培における環境的側面と人為的側面から整理を行った。環境的側面として、茶の栽培適地について、人為的側面として、茶産業形成過程の概要について以下にまとめた。

(1) 茶の栽培適地

茶の品質は、気象と土壌から大きな影響を受ける。標高が高く、気温がやや寒冷で、河川の流域であり、霧の発生が多い場所に上級茶産地の多くが分布する。また地質的には、古生層の土壌が最も適している¹⁸⁾。

一方、近代における茶栽培は、品種改良技術や施肥技術の発達、摘採方法や製造方法の機械化により、栽培地を広げ、茶業として急速な発展を遂げた。生育北限を超えた栽培が可能となり、大量収量を目的とした栽培地選定が行われるようになった。

大石(1967)は日本の茶栽培地を、明治以前からの栽培地と明治初期以降の栽培地の2つに大別している¹⁹⁾。前者は、ヤマチャを基に園茶化したものや畦畔茶などの栽培形態が含まれる。後者は大規模面積の茶畑であり、収量も多いのに比べ、前者は小規模栽培地であり、手摘みなおの伝統的手法で収穫が行われている。

従来、茶は中山間地の焼畑農業地帯の植物として栽培されてきた。佐々木(1962)は、ヤマチャの生態的特色として、耐火性の強い根をあげ、焼畑農業における火入れに対し、ヤマチャの根だけが生き残り、焼畑の輪作2~3年目から急速な生育をすと指摘している²⁰⁾。山本(1961)は、茶が焼畑農業に適した作物であったことが、栽培作物への展開へ繋がったとしている²¹⁾。

在来種の実生栽培が中心であった近代以前の茶栽培は、

茶の生態に適した環境を栽培地として選定しており、本研究では、環境と人の関係性を重視する上から、明治以前からの栽培地を研究対象とした。

また栽培の起源を基に、山本(1961)は静岡県の茶業地域を山地型と台地型に分類した²²⁾。また大石(1967)は、上記タイプに山沿い型を加えて3タイプに分類している²³⁾。山地型は、冷涼な気温と霧の深い高湿度な環境を有し、上級茶栽培に向くとされる。山沿い型は、平地部分で稲作を行い、斜面部分に茶栽培という複合型が多い。また平地型は、高温で芽の生長が早く、中級茶の大量生産に向くとされる。このことは、茶生産における地形要因の重要性を示しており、本研究では地形要因を軸として分析を行うこととした。

(2) 茶産業の形成過程概要

承元5(1211)年に栄西によって執筆された「喫茶養生記」は、日本における初の茶専門文献であるが、喫茶の効用や製法について記されたものであり、産業としての茶についての記述はみられない。弘長2(1262)年に津宗の僧叡尊の弟子である性海が記した「関東往還記」では、「儲茶」の地として守山、愛知河、美濃柏原、駿河国麻利子、清見関、見付、伊豆国逆尾の宿、懐島が記されている。大石(1983)は、これら儲茶の地の多くが現在も茶産地であり、この時期すでに茶の小産地であったと推考している²⁴⁾。

南北朝時代の文献とされる虎関師錬の「異制庭訓往来」には、当時の茶名産地として、梶尾、仁和寺、醍醐、宇治、葉室、般若寺、神尾寺があり、ほか大和宝生、伊賀八鳥、伊勢河居、駿河清見、武蔵河越が明記されている。

天和年間(1681~1683)に成立されたと推定される「百姓伝記」によると、「茶八上下万民の用いるものなり。畠の境、或い八山畑などの、あしくて作毛の出来かぬる処、屋敷のうちなど、明地の処に植えし」と記述されている。江戸時代には茶は日本全国の万民に飲まれるに至り、畑の境や山畑、屋敷の空地に植えることが推奨されていることが読み取れる。

日本の近代茶栽培は、安政6(1859)年の横浜開港による茶の輸出量増加から始まるとされている。外貨獲得のため、全国各地で茶栽培が推奨され、大量収量を目的とした技術革新が進められた。一方、粗悪茶の流出やてん茶栽培地の衰退など新たな課題も生じることとなった。

茶産業の形成過程は、喫茶利用層の拡大による利用目的や需要の変化と関係しながら、産業としての栽培地選定や拡大が図られたと考えられる。

(3) 茶に関する時代区分

茶の利用状況および茶文化、社会背景の関係を分析し、茶に関する時代区分を以下4区分に整理した。

a) i 期(平安時代・鎌倉時代)茶導入期

茶の利用は、古代のヤマチャ利用から始まる。喫茶利用は、最澄、空海、聖一國師等の遣唐、入宋僧により日本へ伝えられたというのが定説となっており、中国の影響を受けながら宮中や貴族による飲料利用または仏教僧侶による寺院茶の発達がなされる。しかし、茶は高級品であり庶民

表 1 研究対象茶産地一覧

茨城県	奥久慈茶（佐貫）	古内茶（上古内）
埼玉県	狭山茶（金子）	
静岡県	川根茶（奥泉・藤川・千頭・田代）	
愛知県	西尾茶（上町）	
滋賀県	信楽茶（朝宮）	土山茶（南土山・前野・頓宮）
京都府	宇治茶（白川）	宇治田原茶（大福谷・奥山田）
福岡県	八女茶（笠原）	
佐賀県	嬉野茶（皿屋谷）	
長崎県	そのぎ茶（太ノ浦）	
熊本県	矢部茶（馬見原）	相良茶（四浦） 鹿北茶（星原）
鹿児島県	伊集院茶（直木・石谷）	知覧茶（手養・仁之野）

※（ ）内は地区名

にまで普及する段階には至らなかった。

鎌倉時代、中国から禅宗を日本に伝来させた僧栄西が、布教活動と共に薬としての茶の効用を流布させた。やがて禅宗は鎌倉幕府に認められ、禅宗と茶は武家政権と密接な関係を築いた。荘園内茶園による買茶が行われ始め、武士階級の勃興は武家茶を生んだ。武士階級の喫茶利用は茶道発展へと結びついていく。

b) ii 期（室町時代・安土桃山時代）喫茶普及期

室町幕府の足利尊氏は茶を重宝し、東山文化期の 8 代將軍足利義政は茶道文化へのきっかけをつくった。安土桃山時代に千利休が茶の湯を大成し、大名階級により茶の湯は政治的利用がなされていく。一方南北朝以降は、一服一銭、街道の茶、町の茶屋等庶民による喫茶習慣も広まっていく。

c) iii 期（江戸時代）商品作物化期

江戸時代、3 代將軍徳川家光以降は政治が安定し、茶の湯は趣味的利用が強まる。元禄文化や化政文化が起こり、裕福な町人の間に茶道が広まる。一方、年貢のための商品作物としての価値が認められ、藩による栽培推奨が行われるようになる。江戸時代後期になると、茶は庶民誰もが飲める嗜好品となっていく。

d) iv 期（明治時代以降）産業構造変革期

幕末に開国がなされ、茶の輸出がはじまると国内消費だけでなく、国外消費が加わり茶の需要が増加する。海外に販路を拡大した茶業は発展をみせるが、茶業に携わる労働者の賃金上昇に伴い、茶の生産過程における省力化が求められ、機械化の時代へと変化していく。

4. 対象茶産地の選定

茶生産の特徴および茶に関する時代区分を基に、研究対象茶産地の選定基準を検討し、選出基準を、① 明治時代以前から茶産地が形成されていること、② 茶産地の発祥および形成過程に関する資料が存在すること、③ 茶産地の発祥地が地図上で特定可能なこと、以上 3 点とした。その結果、17 茶産地 25 地区を選出した（表 1、図 1）。

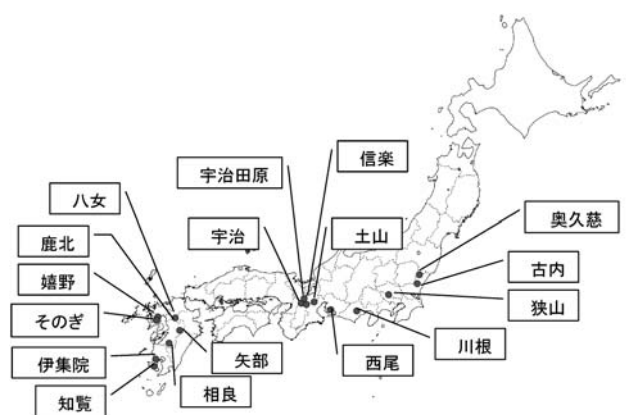


図 1 研究対象茶産地位置図

5. 茶産地の発祥要因の把握

各茶産地の発祥要因を把握するため、① 発祥時期、② 栽培の祖、③ 具体的な発祥行為、④ 栽培場所、⑤ 茶産地所在地、について調査分析を行った。その結果、栽培の祖の相違により、以下 4 つのタイプに分類された（表 2）。なお④ 発祥行為に関しては、茶種の播種から栽培した事が明確なものを「播種・栽培」、種からの栽培か苗からの栽培かが判別不能なものを「栽培」とした。

(1) 僧侶による発祥

茶産地発祥の要因が、僧侶による播種または栽培方法伝授である茶産地は、9 産地 10 地区と対象茶産地の約半数であった。発祥時期は i 期（平安時代・鎌倉時代）または ii 期（室町時代・安土桃山時代）の室町時代が 8 産地あり、早期に産地発祥した傾向を示している。また中国から持ち込まれた茶種を、境内や寺周辺に播種した産地が 6 産地と多くみられた。

(2) 渡来人による発祥

茶産地発祥の要因は、渡来人による播種である茶産地が 2 産地確認された。発祥時期はいずれも ii 期（室町時代・安土桃山時代）であり、茶産地の所在地は九州である。ii 期は、陶磁器史において渡来工人達によって新しい陶磁器製造の潮流が生み出された時期でもある²⁵⁾。豊臣秀吉による朝鮮侵略の派遣軍引き上げにあたり、複数の大名達が自領土に朝鮮工人を連れ帰った社会背景の影響が大きいとされている。執政者により指定された居住区内で、渡来人達が陶工活動等の生活の一部において行った茶栽培が発祥要因となっていた。

(3) 執政者による発祥

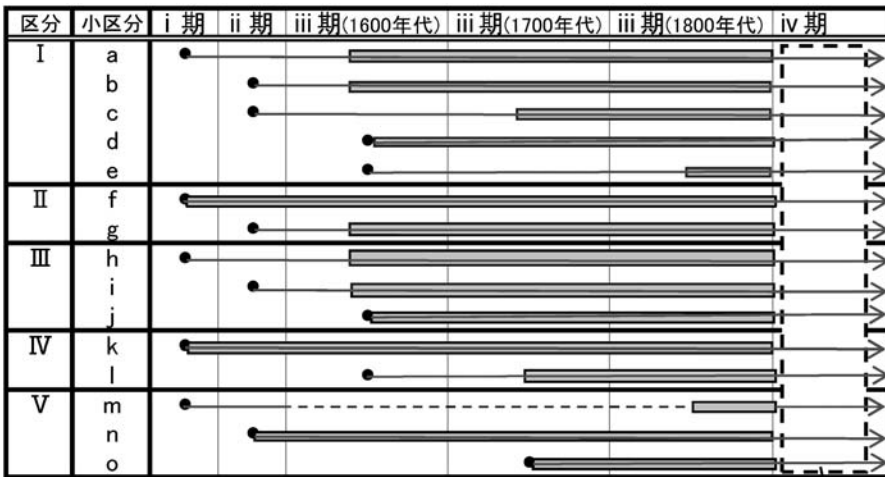
茶産地発祥の要因が、執政者による栽培指示である茶産地は 5 産地であった。発祥時期は、ii 期（室町時代・安土桃山時代）、iii 期（江戸時代）であり、ii 期に発祥した 2 産地は、茶の湯に傾倒した執政者による茶栽培の指示が発祥要因となっていた。一方、iii 期に発祥した 3 産地は、藩政による栽培指示によるもので、自生種であるヤマチャを用

表 2 茶産地発祥の要因

区分	茶産地名	所在地	時期	栽培の祖	発祥行為	境内	寺院周辺	地区内	親種
A	信楽茶	滋賀	i 期 平安時代	最澄	茶種を仙禪寺周辺に播種	●	●		中国
A	狭山茶	埼玉	i 期 鎌倉時代	円仁	境内・寺院領で茶を栽培	●	●		中国(最澄から)
A	西尾茶	愛知	i 期 鎌倉時代	聖一国師	茶種をもたらす				
A	宇治田原茶	京都	i 期 鎌倉時代	光賢	茶種を大福谷周辺に播種			●	榎ノ尾
A	古内茶	茨城	ii 期 室町時代	復庵禪師	茶種を播種				
A	八女茶	福岡	ii 期 室町時代	榮林周瑞禪師	播種、庄家に栽培等伝授			●	中国
A	そのぎ茶	長崎	ii 期 室町時代		境内・彼杵で栽培	●	●		
A	知覧茶(仁之野地区)	鹿児島	ii 期 室町時代		茶を境内で栽培	●			
A	土山茶(前野地区)	滋賀	iii 期 江戸時代	竜溪禪師	茶種を境内前に播種		●		
A	土山茶(南土山地区)	滋賀	iii 期 江戸時代	天嶺師	茶種を寺および地区に播種/ 東海道上山宿で販売	●		●	京都大徳寺
B	嬉野茶	佐賀	ii 期 室町時代	中国人陶工	陶器製造の傍ら他を栽培			●	
B	矢部茶	熊本	ii 期 安土桃山時代	朝鮮渡来人	馬見原の一面で茶を栽培			●	
C	宇治茶	京都	ii 期 室町時代	足利義満(足利幕府)	宇治郷に7つの茶園を開墾			●	
C	伊集院茶	鹿児島	ii 期 安土桃山時代	島津義弘(薩摩藩)	伊集院にて頻繁に茶の湯開催			●	ヤマチャ
C	川根茶	静岡	iii 期 江戸時代		幕府直轄地で茶栽培			●	ヤマチャ
C	相良茶	熊本	iii 期 江戸時代	人吉藩	茶種を畑の畔に播種/山茶栽培			●	ヤマチャ
C	鹿北茶	熊本	iii 期 江戸時代	細川忠利(肥後藩主)	星原の一区画に茶園開墾			●	ヤマチャ
D	知覧茶(手袋地区)	鹿児島	i 期 鎌倉時代	平家落人	地区で茶を栽培	●		●	宇治
D	奥久慈茶	茨城	iii 期 江戸時代	石附兵次	茶種を西福寺境内に播種			●	榎ノ尾
D	土山茶(頓宮地区)	滋賀	iii 期 江戸時代	前野六左衛門	茶種を畑の畔に播種			●	

区分凡例: A 僧侶による播種、B 渡来人による播種、C 執政者による栽培指示、D 庶民による播種

表 3 茶産地形成過程の模式図



小区分該当茶産地

- a 西尾茶
- b 古内茶, 嬉野茶
- c 伊集院茶
- d 相良茶, 鹿北茶, 川根茶
- e 奥久慈茶
- f 信楽茶
- g そのぎ茶, 八女茶, 矢部茶
- h 知覧茶(手袋地区)
- i 知覧茶(仁之野地区)
- j 土山茶(前野地区)
- k 宇治田原茶
- l 土山茶(南土山田地区)
- m 狭山茶
- n 宇治茶
- o 土山茶(頓宮地区)

区分凡例

- I: 藩主導による栽培
- II: 藩庇護のもと、商人の流通販売
- III: 藩庇護のもと、僧侶による栽培
- IV: 僧侶指導のもと、茶農家による栽培
- V: 茶師、商人による栽培・流通販売

時代凡例

- i 期: 平安時代・鎌倉時代
- ii 期: 室町時代・安土桃山時代
- iii 期: 江戸時代
- iv 期: 明治時代以降

近代茶産業期
・形成区分の崩壊

図中凡例

- 発祥時点
- 産業形成期

いて園茶の形成が行われていた。栽培場所は、地区内のヤマチャ自生地であった。

(4) 庶民による発祥

栽培地発祥の要因が、庶民による栽培である茶産地は3産地であった。うち2産地はiii期(江戸時代)に発祥しており、南北朝時代の著作である「異制庭訓往来」に名茶産地として記述された榎ノ尾や宇治から茶種を移入させたものである。栽培場所は、境内、地区内と多様であった。

6. 茶産地の形成過程の把握

各茶産地の形成過程を把握するため、① 発祥時期、② 茶

産業が形成された時期、③ 茶産業形成の主な主導者、④ 茶産業の内容、⑤ 茶産地所在地、について調査分析を行った。その結果、茶産業形成の主導者および茶産業の内容の相違より、以下5つのタイプに分類された(表3)。

(1) 藩主導による栽培

藩主導により、年貢のための商品作物として茶が栽培された産地は8産地であった。発祥時期の違い等により、さらにタイプが細分化されたが、iii期(江戸時代)の初期(1600年代)から産業形成が行われた茶産地が6産地と多かった。iii期初期に産業形成が成された茶産地のうち、発祥時期と産業形成期が同一期のものが3産地存在した。こ

れら相良茶、鹿北茶、川根茶は、いずれも人吉藩、肥後藩、幕府直轄地の藩政指示による年貢のための商品作物が発祥要因であり、産業形成でもあった。

(2) 藩庇護のもとでの商人による流通販売

藩庇護のもと、商人の経済行為として茶産業が行われた産地は4産地であった。うち、信楽茶はi期の平安時代に茶産地が発祥し、それ以降、地頭、有力大名、幕府・諸大名と時代毎の権力者に庇護されながら、献上品としての地位を保ち、商人による流通販売が行われてきた。一方、残り3産地はii期(室町時代・安土桃山時代)に発祥し、iii期初期から商人による流通販売が行われている。これらは「青柳茶」として献上された矢部茶や、八女茶のように茶産地の価値が早期に認知されている傾向があった。また、茶産地所在地が信楽茶を除いて九州であった。

(3) 藩庇護のもとでの僧侶による栽培

藩庇護のもと、僧侶による献上作物の栽培として茶産業が形成された産地が3産地あった。発祥時期の違いにより、さらにタイプが細分化されたが、産業形成期はiii期(江戸時代)初期(1600年代)で一致していた。知覧茶は僧侶と島津家との関係、土山茶は僧侶と天皇家の関係が産業形成に影響を及ぼしていた。

(4) 僧侶指導のもとでの茶農家による栽培

僧侶の指導を受け、茶農家による栽培が行われた産地が2産地存在した。i期の鎌倉時代に発祥した宇治田原茶は、

発祥当時から僧侶の指導のもと天皇家や鎌倉幕府に茶を献上していたが、iii期(江戸時代)中期(1700年代)には茶農家自身が煎茶方法を開発し、販売を行う状況にまで至っている。一方、土山茶はiii期(江戸時代)初期(1600年代)に発祥し、産業形成が始まったiii期(江戸時代)中期(1700年代)は僧侶による茶の栽培と売買だけであったが、やがて商人による茶の販売にまで至る。このタイプの茶産地の所在地は、京都や滋賀であった。

(5) 御茶師、商人による栽培および経済行為

宇治御茶師や商人による栽培および経済行為が行われた産地は3産地存在した。宇治茶はii期の室町時代に幕府の庇護を受けて発祥して以来、有力大名の庇護、御茶師3種34家による献上品生産と、茶名産地としての地位を保ち続けた。栽培方法も宇治固有の覆下栽培であり、この栽培方法は宇治にのみ認められたものであった。狭山茶はi期の鎌倉時代に発祥しながらも、iii期(江戸時代)初期(1600年代)に衰退している。iii期(江戸時代)後期(1800年代)に茶商人の尽力により流通が復興し、製茶技術の向上が図られた。また、土山茶(頓宮地区)はiii期(江戸時代)中期(1700年代)に発祥し、同時に商人による畦畔栽培の推奨や製茶技術の向上が図られ、街道筋の地の利を活かした街道筋茶販売が行われた。

7. 茶産地の地形構造の把握

茶産地が立地する地形および水系の状態を分析した結果、以下のことが明らかとなった(表4)。

表4 茶産地の景観構造

立地 分布	源流部立地型	両側山地上流域立地型	両側山地中流域立地型	河川近接立地型
平坦地(谷底)		宇治茶(百川地区) ii C V 奥久慈茶(佐貴地区) iii D I	土山茶(前野地区) iii A III 土山茶(南土山地区) iii A IV 土山茶(頓宮地区) iii D V	
傾斜地	宇治田原茶(大福谷地区) i A IV 宇治田原茶(奥山田地区) i A IV 信楽茶(朝宮地区) i A II 八女茶(笠原地区) ii A II 嬉野茶(皿屋谷地区) ii B I 鹿北茶(星原地区) iii C I 知覧茶(手養地区) i D III	古内茶(上古内地区) ii A I 知覧茶(仁之野地区) ii A III 矢部茶(馬見原地区) ii B II 川根茶(田代地区) iii C I 川根茶(奥泉地区) iii C I 相良茶(四浦地区) iii C I	川根茶(千頭地区) iii C I 川根茶(藤川地区) iii C I	
平坦地(台地・丘陵上)				西尾茶(上町地区) i A I 狭山茶(金子地区) i A V そのぎ茶(太ノ浦地区) ii A II 伊集院茶(直木地区) ii C I 伊集院茶(石谷地区) ii C I

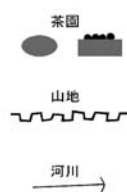
表内凡例

- i 期: 平安時代・鎌倉時代
- ii 期: 室町時代・安土桃山時代
- iii 期: 江戸時代

- A: 僧侶による発祥
- B: 庶民による発祥
- C: 執政者による発祥
- D: 婦人による発祥

- I: 藩主導による栽培
- II: 藩庇護のもと、商人の流通販売
- III: 藩庇護のもと、僧侶による栽培
- IV: 僧侶指導のもと、茶農家による栽培
- V: 茶師、商人による栽培・流通販売

図凡例



茶産地と河川の立地関係を地形上の平面配置の観点から分析した結果、水源に近い谷に立地する「源流部立地型」(6産地7地区)、両側を山地に囲まれた上流域に立地する「両側山地上流域立地型」(7産地7地区)、両側を山地に囲まれた中流域に立地する「両側山地中流域立地型」(2産地5地区)、河川が茶産地近辺の地形低部を流れる「河川近接立地型」(4産地5地区)の4タイプに分類された。

さらに、茶産地と斜面の分布関係を地形上の断面配置の観点から分析した結果、谷底の平坦地に立地するタイプ(3産地5地区)、傾斜地に立地するタイプ(10産地14地区)、台地・丘陵上の平坦地に立地するタイプ(4産地5地区)の3タイプに分類された。なお傾斜地の基準は、傾斜15度以上を急傾斜地、傾斜8度以上を緩傾斜地とする農用地の基準に従い分析を行った。その結果、傾斜地に立地する茶産地のうち、相良茶と嬭野茶のみ急傾斜地に立地し、他(8産地12地区)は緩傾斜地に立地していた。

8. 茶産地の景観構造の把握

茶産地の発祥要因および形成過程と地形構造との関係を分析した結果、茶産地の景観構造において以下の特徴が明らかとなった。

(1) 茶産地発祥時期と地形構造の関係

i 期(平安時代・鎌倉時代)に発祥した茶産地(5産地6地区)は、源流部立地型の傾斜地か、河川近接立地型の台地・丘陵上に立地していた。これらの茶産地は、僧侶による播種・栽培が発祥要因であり、禅宗僧侶による境内および寺院周辺での播種・栽培が多いことから、禅宗寺院の立地条件と茶の栽培環境条件が適合していたと考えられる。

また、iii 期(江戸時代)に発祥した茶産地(5産地10地区)のうち、両側山地上流域立地型または両側山地中流域立地型に立地する茶産地が4産地9地区と多かった。うち、執政者による栽培指示が発祥要因の茶産地は、全て傾斜地に立地し、僧侶による播種・栽培または庶民による播種・栽培が発祥要因の茶産地は、平坦地(谷底)に立地していた。

(2) 茶産地発祥要因と地形構造の関係

渡来人による播種が発祥要因の茶産地(2産地2地区)は、源流部立地型または両側山地上流域立地型の傾斜地に立地していた。渡来人の居住地については、専門技術の漏えいを防ぐために偏狭な地に設ける傾向があり、茶栽培に適した地と一致した可能性が推察された。

また、執政者による栽培指示が発祥要因の茶産地のうち、ヤマチャの園茶化を図った茶産地(3産地4地区)は、傾斜地か平坦地(台地・丘陵地上)に立地していた。これは、自生するヤマチャを基盤とした栽培方法であるため、ヤマチャの分布地に茶産地が立地していたためである。

(3) 茶産地形成過程と地形構造の関係

茶産地の形成過程と地形構造の関係を分析したが、一定の傾向は読み取れなかった。これは、茶産地の産業形成が

地形構造を形成要因の第一義に捉えていないためと考えられる。産業が円滑に形成されるためには流通に必要なインフラや需要を満たすための栽培面積の確保が重要となる。環境と人との関係が茶産業の形成過程により変化することが明らかとなった。

9. まとめ

本研究は、明治以前からの茶産地を研究対象とし、その発祥要因および江戸時代までの茶産地形成過程と地形構造の関係から景観構造とその特徴について以下の点が明らかとなった。

茶産地の発祥要因は、発祥の祖の相違により4タイプに分類された。また、茶産地の形成過程は、主導者や生産・流通体制などの茶産業のあり方の相違により5タイプに分類された。

茶産地の地形構造は、茶産地と河川の立地関係により4タイプに、茶産地と傾斜分布関係から3タイプに整理された。

茶産地の景観構造は、発祥時期による発祥要因に特徴があり、それらが茶産地としての地形選定に影響をおよぼしていたことが明らかとなった。

明治以降、外貨獲得商品として注目された茶は、茶産業の大きな変革期を迎える。近代化に伴う技術革新によって変化した茶産業のあり方は、茶産地の景観構造をも変化させていったと考えられる。今後は、明治以降の茶産業および茶産地の景観の変遷を環境的要因および人的要因の関係性から明らかにし、「生きている景観」としての茶産地のあり方を検討する上での一助としたい。

また、今回茶産地の茶畑のみを対象として研究を行ったが、集落や周辺環境との関係性を構造的に把握することも重要であり、さらなる調査分析が必要と考える。

参考文献

- 1) 西田善太(2009): BRUTUS「おいしいお茶の教科書」, マガジンハウス, 14-93.
- 2) <http://www.ichieniccha.com/undo/hajimari/h.1.html> (2009年7月26日現在).
- 3) 文化庁文化財部記念物課監修(2005): 日本の文化的景観—農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書—: 同成社.
- 4) マテオ・ダリオ・パオルッチ・宮脇 勝(2005): 群馬県六村集落六合村赤岩地区における文化的景観に関する研究—歴史的な絵図, 地籍図, 土地台帳を用いた農地のランドスケープの歴史の変遷分析—: 都市計画学会論文集 40 (3), 817-822.
- 5) 宮脇 勝・深谷正則(2008): 千葉県域の利根川水系における水塚及び屋敷林の文化的景観に関する研究—栄町, 本杵村, 印西市, 我孫子市, 柏市, 白井市の水塚と屋敷林のタイプ分類, 保存状態, 所有者意識—: 都市計画学会論文集 43 (3), 673-678.
- 6) 水野和浩・栗田和弥・麻生 恵(1999): 農村地域における景観の変遷に関する基礎的研究: ランドスケープ研究 62 (5), 715-720.
- 7) 佐藤治雄・前中久行・川原 淳(1997): 土地利用の変遷からみた琵琶湖湖岸域における景観変化: ランドスケープ研究 60 (5), 515-520.

- 8) 横張 真・渡部陽介 (2009): 農山村における文化的景観の動態保全: ランドスケープ研究 73 (1), 10-13.
- 9) 深町加津江 (2000): 農山村における土地利用とランドスケープの変化: ランドスケープ研究 64 (2), 147-150.
- 10) 三好岩男・深町加津江・大岸万里子・奥 敬一 (2007): 丹後半島山間地の2集落における地形的要因からみた水利用形態と景観形成: ランドスケープ研究 70 (5), 683-688.
- 11) 篠原 修 (2009): 時代を画す文化的景観の概念とその展望: ランドスケープ 73 (1), 2-5.
- 12) 大石貞男 (2004): 日本茶業発達史 大石貞男作品集 1, 農山漁村文化協会.
- 13) 大石貞男 (2004): 茶の栽培と製造 I 大石貞男作品集 3, 農山漁村文化協会.
- 14) 谷 晃 (2007): 茶人たちの日本文化史, 講談社.
- 15) 淵之上康元 (1999): 日本茶全書, 農文協, 271-277, 344-345.
- 16) 全国農業会茶業部編 (1948): 日本茶業史第三篇, 全国農業会, 336-366.
- 17) 前掲 12) 311-312.
- 18) 前掲 13) 38-39, 104-105.
- 19) 前掲 12) 332-338.
- 20) 前掲 12) 173-176.
- 21) 前掲 12) 179-182.
- 22) 前掲 12) 146-147.
- 23) 前掲 13) 123-124.
- 24) 前掲 12) 218-219.
- 25) 村手久仁子 (2009) 陶磁器産地の景観構造と特性に関する研究, 東京農業大学大学院造園学専攻修士論文.
- 26) 愛知県 (1978): 愛知の茶, 32-33.
- 27) 西尾市 (1978): 西尾市史 4 巻, 996-1023.
- 28) 第十八回関東ブロック茶の共進会記念誌編集委員会 (1989): 茨城の茶業史, 茨城県茶生産者組合連合会, 4-6, 393-397.
- 29) 常北町史編纂委員会 (1988): 常北町史, 常北町, 27-33, 398-401, 544-547, 708-713.
- 30) 大子町 (1980): 大子町史, 100-105, 162, 206-209.
- 31) 宇治田原町 (1980): 宇治田原町史第一巻, 529-538.
- 32) 黒木町 (1993): 黒木町史, 339-345, 820-823, 943-945.
- 33) 土山町 (1961): 土山町史, 311-319, 475-477, 535.
- 34) 滋賀県農産普及課 (1987): 茶業要覧, 4-7.
- 35) 鹿児島県茶業振興連絡協議会 (1986): 鹿児島県茶業史, 鹿児島県茶業振興連絡協議会, 1171-1190.
- 36) 大護八朗 (1973): 狭山茶業史, 埼玉県茶業協会, 10-15 48-63.
- 37) 狭山市 (1996): 狭山市史 通史編 1, 689-701.
- 38) 滋賀県立甲賀高等学校社会部, 信楽町史編纂委員会編 (1957): 信楽町史, 信楽町, 63-65, 104-107, 116-119, 146-151.
- 39) 信楽町茶業協会 (1991): 朝宮茶 30 年のあゆみ, 信楽町茶業協会, 21-24.
- 40) 宇治市 (1976): 宇治市史 3, 3-27.
- 41) 籠田 勝 (1984): 熊本県茶業史, 第三十五回全国お茶まつり大会事務局, 7-12, 255-280.
- 42) 相良村誌編纂委員会 (1996): 相良村誌 人文編, 相良村, 234, 326-331.
- 43) 佐賀県茶業試験場 (1998): 佐賀県茶業の発展と茶業試験場のあゆみ, 17-27.
- 44) 蘇陽町誌編纂委員会 (1996): 蘇陽町誌, 蘇陽町, 234-260, 396.
- 45) 本川根町史編纂委員会 (2005): 本川根町史 通史編 2, 本川根町, 148, 174, 338-347, 496-511.
- 46) 本川根町史編纂委員会 (2003): 本川根町史 通史編 3, 本川根町, 28-37, 264-269, 390-393.

Landscape Structures of Japanese Tea-Producing Districts Formed before the Modern Age

By

Ayumi ARAI* and Hiroshi UEDA**

(Received August 6, 2009/Accepted December 4, 2009)

Summary : In accordance with varying social demands for tea through the ages, tea-producing districts were changed, resulting in development of various tea growing and manufacturing technologies. Furthermore, the appropriateness of a natural environment for tea production is considered to be deeply related to the formation of tea-producing districts. This study is aimed at summarizing the origination circumstances and formation processes of tea-producing districts in Japan and defining the landscape structures in these districts based on the identification of topographic features and water systems.

The selected study areas are 25 tea-producing districts formed before the modern age when the selection of cultivating land depended on whether its natural environment was appropriate for tea production.

As a result of the analysis, the origination factors of the tea-producing districts under study were classified into four types based on the originators. The formation processes of the tea-producing districts were classified into five types based on the management systems of tea-producing. Furthermore, topographic structures of these districts were classified into four types based on the relationship between tea-producing districts and water systems, and three types based on the relationship between tea-producing districts and gradients.

Lastly, landscape structures were classified into types to demonstrate that the landscape structures of Japanese tea-producing districts are characterized by the origination era and factors. Furthermore, the selection of cultivating land was found to be related to the origination of tea-producing districts.

Key words : Japanese Tea-producing districts, Tea plantation landscape, Landform, Structure of landscape, Cultural landscape

* Department of Landscape Architecture Science, Faculty of Regional Environment Science, Tokyo University of Agriculture

** City of Hamamatsu